

もくじ

じんぶつしょうかい 人物紹介 8

プロローグ 変態へんたいしないイモムシくん 9

イモムシくんへ 19



不思議ふしぎに気づく

20

だい しょう 第1章 どうして紅葉こうようするの？

～「なぜ？」「どうして？」は学びまなのはじまり～

21

イモムシくんへ 33



感じるかんことから問いとが生まれる

34

キミしゅやくが主役べんきょうの勉強

36

だい しょう 第2章 立体りったいは何面体なんめんたい？

～まちがわなければ気づきかない～

37

イモムシくんへ 46



「論理的ろんりてきに正しいただしい」を探たづねる

47

キミしゅやくが主役べんきょうの勉強

50

だい しょう
第3章

サイコロをつくるには？

しこうさくご
～試行錯誤はおもしろい～

51

イモムシくんへ

64



たくさんまちがうからたくさん学べる

65

キミが主役の勉強

68

だい しょう
第4章

知らないことって、わくわくする

まな じぶん なか
～学びは自分の中にある～

69

イモムシくんへ

90



世界は学びにあふれている

91

キミが主役の勉強

94

エピローグ イモムシくんはどこへ？

95

もっと知りたい人のための放課後教室

102

読んで頭がモヤモヤしている人のための解説

110



タイガ

思ったことをすぐに口に出す。

「わかりません」と平気で言える。

「不思議」を見つけると自然にからだは動いてしまう。

シホ

マイペースでまわりからは「不思議ちゃん」だと思われている。

未確認生物ツチノコ

の存在を信じている。



カズ

学校での成績はいつもトップだけ

れど、塾では苦戦中。タイガとシ

ホとは同じ団地で育ったおさなな

じみ。



ほう か ご ねん くみ きょうしつ
放課後の5年2組の教室。

ひとりの男の子がからだをゆらして、右に行っ
たり左に行ったり。うしろの壁のモーツアルトの
ポスターを見つめながら、教室を動きまわってい
ます。

がっこう らいしゅうえんそう き がくだん
学校に来週演奏に来てくれる楽団のポスター
は、モーツアルトの大きな似顔絵でした。今朝、
せんせい
先生がはってくれたものです。

「ねえねえ、タイガくんたら、またへんだよ」

「きよろきよろしたり、動きまわったり、ほんと
お っ
落ち着きないよな」

タイガを見ながら、クラスメートがこそこそ
い
言っています。

「ねえ、不思議不思議のシホちゃんも、またイモ
む はな
ムシに向かってなにか話しているよ」

だれかが、窓^{まど}べにいるシホを指^{ゆび}さしました。

シホが飼^{しいく}育^なケースの中^{なか}に向^むかってひとりごとを
言^いっています。

ケースの中^{なか}には、葉^はっぱの上^{うえ}にイモムシが1
匹^{びき}。くねくねとからだをくねらせています。

このイモムシは、変^{へん}態^{たい}しないイモムシくん。ほ
かのイモムシは、どれもサナギになってやがて
チョウになり飛^とび立^たっていったのに、いつまで
たってもイモムシのままです。

こうしてのんびりと葉^はっぱを食^たべていますが、
じつは、人^{にんげん}間の言^{こと}ばがわかるちょっと不思議^{ふしぎ}なイ
モムシなのです。

「イモムシくん、今^{きょう}日の空^{そら}にはキミのような雲^{くも}が
たくさんういているよ。ツチノコも、ほらね、
どかーんとうかんでいるでしょ」

シホはうれしそうに話^{はな}しかけています。

シホは、未^み確^{かく}認^{にん}生^{せい}物^{ぶつ}のツチノコにあこがれてい

ます。鳥とりや虫むし、草花くさばなに出会うために自然しぜんの中なかを探たん
索さくするのが好きすなシホは、いつかツチノコとも会あ
えるかも、と期待きたいしているのです。

ろうか側がわの真まん中なかの席せきでは、カズがノートをに
らみつけてぶつぶつと言いっています。

「なんだよ、この問題もんだい」

学校がっこうのテストならすらすら解とけるし、先生せんせいから
もほめられます。それなのに、塾じゅくの問題もんだいとなる
と、そうはいかないのです。



カズは、きのうの塾の宿題が解けなくて、イライラしていました。

「あの三人って、なんだかちょっとへん」

クスクス笑いながら、だれかが言いました。

「ぜんぜんちがうタイプだけど、へんなところが似てるかも」

「同じ団地に住んで、おさななじみなんだって」

こそこそが続きます。

まど窓から西日がさしてきました。

「やば。もう帰らなくちゃ」

「おれたちはもう、帰ろう」

「帰ろ」

みんなは、がやがやと教室を出ていきました。

教室には、タイガとシホとカズの三人だけが残りました。

「もう！」

カズが、自分の頭をくしゅくしゅっとして、ふ

とタイガのほうを見ました。

「タイガ、なにやってるの？」

カズは、すわったまま聞きました。

気がついたシホもよってきました。

「タイガ、モーツァルトが好きなの？」

タイガは、ポスターから目をはなさずにタタ
タツと右のほうに行ったり、タタタツと左に
行ったりしながら答えました。

「この人ね、ぼくがどこに行っても、こっちを見
てくるんだよ」



「あたりまえじゃん。こっちを見ている絵が描か
れているんだから」

あきれたようにカズが言いました。

「やっば、こっち見てくるよ！ **不思議だ、不思議だ**」

タイガは夢中になっていて、カズの言うこと
は耳に入らないようです。教室のはしからはし
へ動きまわって「**不思議だ**」と首をかしげるば
かり。

「ほんと？」

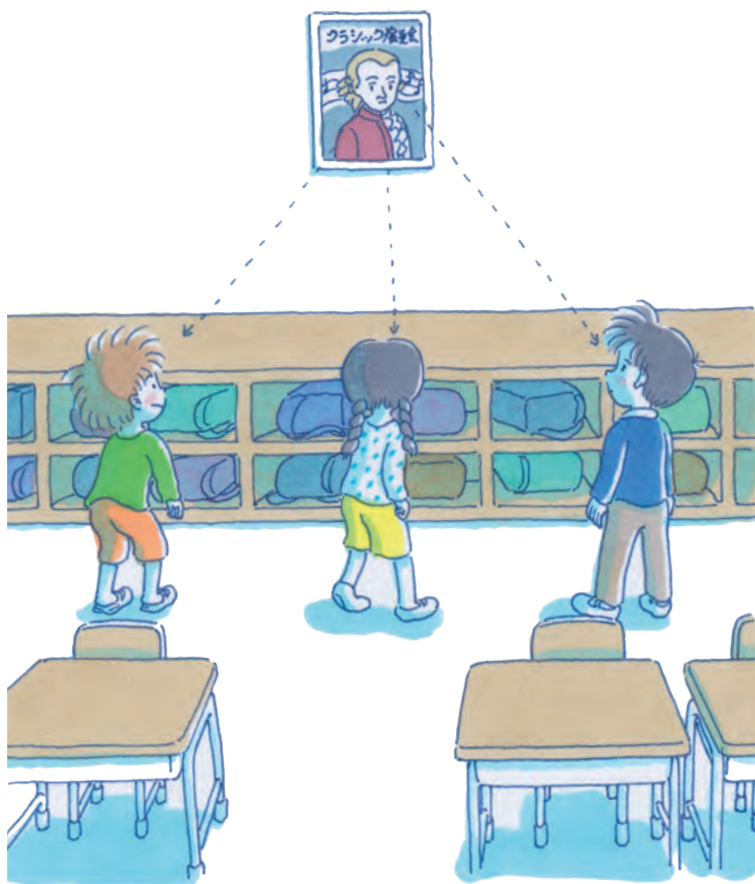
シホもポスターを見ながら、教室のろうか側か
ら窓側まで動いてみました。

「ほんとだ！ 移動しているあいだも、あたしの
ことを目で追ってくるみたい」

「絵なんだから、そんなわけないじゃん」

カズが言うとシホは、

「じゃあ、カズも動いてみてよ」



と、^{かえ}返してきました。

シホに^い言われてカズもやってみると……。

(えっ!?)

「ね、ずっと^み見てくるでしょ。実^{じっさい}際^{ひと}の人だったら
^め目^あが合^あわなくなるのに」

「ポスターが^{へいめん}平面だからそう^み見えるだけだよ」

「そりゃそうだけど……、でも」

タイガはそう^い言いながら、^{うご}動きまわり、^{くび}首をひねるばかり。

「とにかく、ポスターが^{へいめん}平面だからだよ！ おれ、^{じゅく}塾^いに行かなくちゃ」

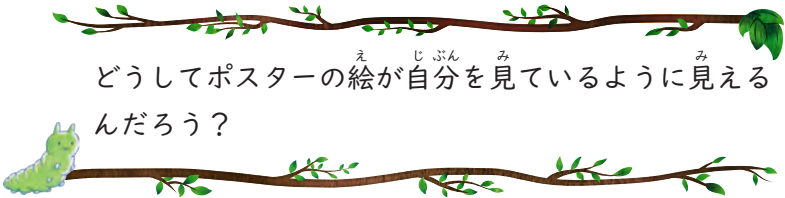
カズはノートをリュックに入^いれると、ぷいっと、^{きょうしつ}教室^でを出^いて行ってしまいました。

「なんで、^{おこ}怒^{おこ}ったの？」

シホが^め目をぱちくりさせました。

「**ふしぎだ、ふしぎだ**」

タイガは、ポスターを^み見ながらくり返^{かえ}しています。



どうしてポスターの^え絵^{じぶん}が自分^みを見^みているように見えるんだらう？

「まったく。タイガがへんなこと言うから、塾の
もんだい しゅうちゅう
問題に集中できなかった」

かえ みち
帰り道。カズは、ぶりぶりしながら歩いていま
した。

「だけど……、たしかにどこへ行っても見られて
いるみたいだった。平面だと、なぜ、こっちを向
いているように見えるんだろう？」

ふと、そう口にしてから、あたま
頭をぶんぶんとふり
ました。

「おれ、なに言ってんだ。とにかくいまは塾の成
せき あ
績上げないと！」

このあいだの塾のテストの結果ががくっと下が
り、つぎ
次でがんばらないと、した
下のクラスに落ちてし
まうかもしれません。

(いまはいちばんうえ
一番上のクラスだけど、つぎ
次のテストでま
わる てんと
た悪い点取ったら……)

い
言いようのない不安がこみあげてきます。